

掌編短編小説集2

追補版

「ある日、突然」

物書き

うときゅういっき



掌編短編小説集 2

追補版

ある日、突然」

「

うときゆういっき

目次

●短編小説

「ナポレオンと苺」

●掌編小説

「せっちゃん」

●掌編小説

「アンケ」

●掌編小説

「夜桜の下、仔犬を連れた奥さん」

●短編小説

「ゆりっぺ」

追補した小説

●掌編小説

「老斗（らおど）」

●掌編小説

「探し物はなんですか」

以上、右記は

短編小説「ゆりっぺ」までが二〇一六年原作の掌編短編小説を二〇二二年に改題及び内容をリライトしたもので

「老斗（らおど）」及び「探し物はなんですか」の二作が二〇二二年の作物です。
原稿用紙三枚以内掌編小説シリーズの中の一作でございます。

(序)

以下は追補版以前のオリジナル版に対するコメントです。

●「事はある日、突然やって来る。

何の前触れもなく、唐突に」

の様にも見えますが、実はその原因は自分であったり、自分であることに気づいていないが為だったりする場合も多々ありそうです。

今回はそれを「自分が図らずも傷つけてしまった女性の方々」の事例をもとに書いてみました。

図らずも傷つけてしまった事に気づいたのが何と短くても10年、長いものになりますと何と50年後の昨今。

そしてその女性たちは居なくなるか既に他界されてしまっている。

遅きに失した話ばかりでございます。本書の話は。

以下は追補分についてのコメントです。

●二〇二二年、新たに「ある日、突然」な出来事についての作物が二つ加わりました。

事の起こった時期は他の作物を書いていた時期とほぼ同じですが、作物にするのに些か時間がかかりました。

●タイトルの「(カギ括弧)のズレも「ある日突然に」起こった出来事でした。

如何にも題名にふさわしい出来事だったので、そのまま出版することに致しました。

うときゅういっき

短編小説

「ナポレオンと苺」

「好きなものは何ですか？」
「ナポレオンと母」

娘がいて
青年がいた
彼がさき
答えたのは彼女。

青年は顔を赤くする
好きなものは...？
だから、母とナポレオン！

沈黙が訪れ
時が流れ
娘を不安にさせた
果物の好き嫌いで
子供っぽいから—



青年は英雄になりかけた
けれど無名で無力で無名だ
若くは何も力がない
彼は気がおさまらぬ
特に今—

まもなく
青いボンの小箱が
青年に贈られた
ナポレオンという名を持つ
犬糞の桜桃。

「食べて下さい」



Who am I?



僕が大学一年生に上がるまで、我が家では、家族そろって仏壇に向かい、御経を上げるという田舎まがいの古風な習慣がありました。中止になったのは、確か、親父が心筋梗塞で倒れて以降だったと思います。

ある時、御経を読んだその後で、弟が、
「兄貴の読経は、つるつるの声だ。声だけ良くて有難味がない。ちょっと恥ずかしいかも、な」

と、高校生とは思えないほど落ち着き払った声で、高段におわします大僧正様のように宣った（のたまった）のです。ぼくは、心の中で思い切り後ろにのけぞりましたが「そうかもしれない」とこちらも、真っ向唐竹割りの真剣を白羽取りしたぞ、とばかりに平静を装いました。

何せ相手は、漱石先生に師事して、「則天去私」つまり、私心を捨てて、天の運びに則って（のっとって）動く、の域に達しようか、という御仁ですから、そういう人間に楯を突いてもかないっこありません。そこまでで精一杯です。後は、無言、沈黙、奇妙な間。

とにかく周りは偉い人だらけで本当に困りました。

親父からは「情けないヤツだ」と言われ、弟からは前述のごとく「恥ずかしいヤツだ」と言われ、妹からは「お兄ちゃんだけ、兄弟じゃないみたい」と言われ、お袋は何も言わず、庇いもせず。あるいはまた、たまに訪れる親戚の叔母さんからは、「かずちゃんは、ちょっと陰気なところがある」とまで。

それはそうです。陰気にもなります。だって、毎日偉い人々に囲まれて、日々へこまされていたんですから、自信も元気もなくなるというものです。

しかし、それでも、いつかは見ておれ、そのうち大作家になって鼻の穴を開かしてやるからと、大きな望みを抱きましたが、悲しいかな、願望と実態の間には、大きな隔たりがあり、実態の方は、しゃかりきになってペダルを漕ぐのですが、その力が一向に願望とい

う車輪には伝わらず、結果、疲れとからだちが増すばかりで、力の伝わらない自転車はずると坂を後ろに下るばかりでした。

ですが、弟とは意見が合うこともありました。この「則天去私」の御仁は、何故か「これが青春だ！」とか、たしか「夕日ヶ丘の総理大臣」？だとか、夏木陽介や中村雅俊やレッツビギン！とにかく何か始めよう！の村野武範の青春ものが大好きで、更にまた、19歳でデビュー仕立ての名取裕子の「おゆき」という朝の連続ドラマで、おゆきがそれまでのなんともいえない穏やかでのほほん顔から突然夜叉般若の顔に変化（へんげ）したのを見て、「出来るヤツ！」と一声言った後、続けて「これはいい女だ！おいしそうだ」といったことでも意見が一致したりしました。

そうこうしているうちに、僕はある事情から、大学に登校できなくなり、弟はよもやの滑り止めも落っこちて浪人生になり、お互い悶々とする日々を送ることになったのです。時に僕は20歳、弟は18歳でした。

今思えば、親父とお袋は、同時に問題学生を二人抱えることになって、心中穏やかではなかったと思います。それは自分がふたりの息子を持つ身になって初めて分かりました。

注) ポスターは日本テレビ放送網株及び配給映画会社にすべての著作制作権が存します。当方には一切ございません。

(



大学のキャンパスに行くことが出来なくなって、時間ばかりが余ってしまったので、地元の大きな書店でアルバイトを始めました。

そこである女の子と知り合ったのです。実はその前、それはそれはすてきなお嬢さんに恋をして、必死の努力もむなしく、はかない結末を迎えてしまった直後だったので、ほかの女の子の人が全くカボチャかジャガイモにしか見えず、まるで目に入らなかったのですが、先行きが全く何も見えていず、確たる自信もない僕の、一体どこがいいのかさっぱり分からないまま、その子の強いアプローチに根負けしておつきあいをするようになりました。

正直、第一印象は、学生の割にはすこし派手。お化粧品は濃いし、ちょっとボディーコンシャス過ぎるし、なんとなく男出入りが多そうだと、それはそれはすてきなお嬢さんとは正反対のタイプだったので、戸惑ったのかもしれませんが。

それであるとき、誠に大きなお世話だとは思いますが、いささか控えめにした方がいいような気もするのだが、と感想を述べると、なんと翌日から、さっぱりぱっきり「けばさもどき」を取り払ってお店へアルバイトに来たのです。

「えーつ、マジ？ちょっとやばいかも」と思ったのですが、涙とプレゼントと並外れたひとなつこさに負けてしまいました。その子のひとなつこさは、お父さん子でもあり、お兄ちゃん子でもあったからのようでした。

しかし、ためらいながらも付き合ってみると、信じられないくらい献身的で、さみしがり屋で、甘えん坊なところがありました。また、僕が翻訳したロシア語の童話を清書し、それに自分で絵をつけて絵本みたいなものを作ったり、自分の文字とイラストでノートに書いた僕とその子をなぞらえた手作りの寓話「ナポレオンと苺」を送ってくれたりする、芸才もある子でした。「ありがとう」という言葉が、滅多にないこと、あり得ないことをしてくれたので、「有り難し」転じて「ありがとう」になったのだと教えてくれたのもその子でした。

その子の目にはぼくはこう映っているようでした。

「好きなものはなに？」

「ナポレオンと苺」

娘がいて

青年がいた

彼がきき

答えたのは彼女

青年は顔をあげる
好きなものは・・・？
だから、苺とナポレオン！

沈黙が訪れ
時が流れ
娘を不安にさせた
果物が好きなんて
子供っぽいかしらー

青年は英雄になりたかった
けれどまだ 無力で無名だ
若さが何よりの力なのに
彼はきづかず みじめだった
特に今一

まもなく
青いリボンの小箱が
青年に贈られた
ナポレオンという名を持った
大粒の桜桃

「食べて下さい」

その後、僕はアルバイトでためたお金で、ロシア語の勉強やどうしても一度大陸を見たい、異国の地をこの足で踏んでみたい、そうして向こうで何か大きなものをつかみたいという思いが募り、当時のソビエトに一ヶ月間、短期語学留学をすることをその子に告げました。その子は、はじめ何も言わなかったのですが、そのうち出発までの残りの日を辛そうに数えるようになり、あるときには、

「行ったら、もう帰ってこないような気がするの。手の届かないところへ行っちゃうような。わたしの方を見てくれなくなるような気が…」

僕は少し返事に困りました。当時、野心満々だったぼくは、確かにそういうことが起きるかもしれないと思いましたが、さすがにそれはいえませんでした。

ところが、僕ら短期留学生を乗せたロシア船ナホトカ号が横浜の栈橋から大陸の東岸の窓口であるナホトカに向けて徐々に岸壁を離れ、次第に速度を上げていくその後を、泣きな

がら手を振って、どこまでも、どこまでも棧橋の突端ぎりぎりまで追いかけてくるその姿を目の当たりにして、頭の中の野心がみるみるうちに薄らぎ、すてきなお嬢さんが瞬間蒸発したのです。そうして、出帆したばかりなのに、早く帰ってあげたい、一刻も早く帰りたいと強く思ったのです。

後で思ったことですが、その子は僕の中に亡くなったお父さんの影を見ていたのです。僕ではなくて、素敵だったのに早逝したおとうさんの代役を。そのため、その後に様々なことが起きることになるのですが、そのときはそんなことは知るよしもありませんでした。

実はこの「美しい青春の一齣」は、その後に続く地獄のほんの一里塚に過ぎなかったのです。



ロシアでの一ヶ月間に及ぶセミナーハウスでの勉学と、街へ出での語学の腕試しや物見遊山を終え、帰国してからおつきあいは急速に深まりはじめました。

何でそんなにいろいろ才能があるのに経済的理由その他で、いわゆる「三流短大」に行かざるを得なくなったやむを得ない理由も分かりました。また、こちらから訊いた訳ではないんですが、前におつきあいしていたひとが「折角作った料理を残ったからとあまりにも無造作にごみ箱に捨てた姿を見たから」という別れというか見切りの理由も無理からぬことかもしれないなと思い、女の人とはカッコや面白さだけを見ているわけではないのだとも知りました。更にその頃増えていた抜け毛を気にしている僕に、禿げたら私の髪の毛でカツラを作ってあげるから大丈夫だよ、と言われて泣きそうになったこともありました。あと、それとお父さんがどんなに素敵だったかと言うことも。そんな風にしてその子のことを次第に知るうちに仲はだんだん親密になり、とても楽しい日々が続きました。アルバイトで稼いだお金であちこち旅行をし、その子の部屋に泊まるようにもなりました。

ところが、それから1年ほど経ったあるとき、その子のお母さんに再婚話が降ってわいてきたのです。その子はとても動揺しました。こころがあっちに飛び、こっちに飛び、泣いたり怒り出したりして不安定きわまりなくなりました。あのお父さんを裏切って、あのお父さんのことを忘れて、頭のはげ上がった、歯の黄ばんだ親父と結婚するなんて許せない。お父さんがかわいそうだ。その結婚を認めることは、自分もおとうさんを裏切ることになる。だから絶対認めないし、自分もその軍門には降らない(くだらない)、という感じでした。

その目をすこしほかに転じて貰いたくて、僕はその子を家に招待し、両親に合わせようと思い立ちました。結婚を前提にというわけではないんですが、そんなことをするくらい大切に思っているのだよと言うことを示したかったのです。心配している人間が横にいるよということも思い起こしてほしかったのです。

ところが、そのことを事前に親に話していたにもかかわらず、両親は来たときも、帰るときも一度も顔を出さず、お邪魔しますにも、お邪魔しましたにも何の返答もしなかったのです。おそらく、親父がそう指示をして、お袋がいつも通り黙って従ったのだと思います。

しかしその子はそのことについて何も言いませんでした。それがかえってつらく、ころの中で何度も謝りました。

そんな折、ロシア語の通訳のアルバイトのテストに受かり、1週間ほど、富士の裾野の街にあるエアコン製造工場に住み込みで行くことになったのですが、アジア系ロシア人の通訳がいて、それとは比較にならないほど自分の通訳としての実力がお粗末なことがすぐに分かり、行って二日後に辞表を出して、東京に戻ることにしました。来るときはその裾野の街にある駅まで、その子が電車に乗ってついてきてくれたので、一刻も早くその子のアパートに行って驚かせてあげようと階段を上って、部屋のドアを開けて、愕然としました。男の人が部屋の奥に居たのです。僕も驚きましたが、彼女もたいそう驚いたようです。なんで、居るの？と。

「ごめんなさい。ちょっと外に出てて」

そう言われて外に出ましたが、暫くしてその男の人は帰っていきました。

その後、その子は、

「私をぶって！思いっきりぶって！そうしないと糸が切れた凧みたいにどっか行っちゃいそうなの。怖い、どこへいっちゃうか…」

ぼくは大丈夫、大丈夫、どこにも行かせないからとその子の背中をさすりました。何故か、抱きしめるのがはばかれたのです。よく分かりません。

そうして、何か「癒やし薬」でもすり込むように、ゆっくりと背中をさすったんですが、背中をさする度に、掌（てのひら）がブラジャーのホックに当たってさすりにくい、なんかいまひとつダイレクトに薬効が届いていない気がするな、とへんなことを思ったのを妙にはっきり覚えています。

しかし、その翌日からその子は、アパートから姿を消してしまいました。その子のアパートの前で、帰りを待ち続けました。今思えばよく、近所の人に不審者として警察に通報されなかったものだと不思議です。

さすがに疲れて家にもどったのですが、戻ると親父が「不登校学生の方で何を女に狂ってるんだ、目を覚ませ！たわけ者が！」と一喝され、それでも飛び出そうとすると、心筋梗塞を患った後の親父が胸を押さえて苦しみだしたと、お袋が言いすがって「それでもかずちゃん、行こうとするの？」と言ったものですから、さすがにそれ以上は先に行けず、ただただ家の中で、その子の帰りを待つしかありませんでした。

別の男の人に抱かれている妄想が、時々刻々僕を苦しめました。

「焼き餅」です。

その子の裏切りに対する強烈な怒りや憎しみや、手の中に何もないむなしさやさみしさが何度も何度もおそってきて、殆ど半狂乱みたいな状態でした。

男は女が相手に身体を奪われることに嫉妬し、女は男が相手にこころを奪われることに嫉妬する、と何かで読んだことを思い出したりしました。女の人のは実感できませんでしたが、男の人の方の気持ちは痛いほど分かりました。

「チクしょー、チクしょー、この野郎、この女（あま）！！」という感じでした。気づかれずに踏みつけられて、苦し紛れに身体を右へ、左へ「くの字」逆「くの字」に何度も折って、路上の上で激しくのたうち回るミミズみたいになっているぼくに、家では僕より大きな部屋で受験勉強をしていた弟が出てきて、

「兄貴、おなごは魔物じゃ。則天去私、則天去私」といいました。

同じ「そくてんきょし」はきょしでも、僕の方は「即転虚死」の方の「きょし」でした。

スッテン転ろリンして、虚しく（むなしく）死んでいるような状態だったのです。



それから数ヶ月が経ちました。その子から突然、電話がかかってきました。当時は携帯電話など無論なく、家人の誰にとられるか分からない電話は、かなり危険だったのですが、幸いそのときは僕一人でした。

求めに応じて、その子と外で会いました。聞くと、アパートを飛び出した後、別の男の人に拾われて、一緒に居るようになったこと。大きな病気をして、苦しんでいたときに、その人が真剣に看病してくれて、一緒に住むようになり、今も一緒に住んでいるということなどを聞きました。

「で、どうしようと？」

と聞くと

「どうしているかなと思って…」

とだけ言われました。そして

「あのとき、思いっきりぶっつけていたら、ちがったかもしれないかなって…」

。しかし、その先はありませんでした。何かを期待しましたが、こちらからは何も言い出せませんでした。

それは、おそらく外に出て、あちこち回って経験をし、ぼくがおとうさんの代役でしかないこと、そして、そんな遺影をいつまで追いかけても仕方がないことに気づいたのかもしれない、簡単に言うと熱が覚めたということかなと。

もう戻らないだろうなという読みからでしたが、そういうふうに、努めて冷静に考えようとする一方で、心臓は僕の頭を裏切って、どっくんどっくん、鳴り続けていました。

「じゃあ、もう会うこともないと思うけれど、元気でね」

とってお別れしようと思いました。

「いや、ちょっと待って！やっぱり戻ってもいい？」

と後ろから声を懸けられるのを、心底期待しましたが、それはありませんでした。振り返ると、もうその姿はなかったのです。

後日、その子のお母さんがお詫びの手紙を送ってよこしました。おかあさんとは上京した折、何度か会って、持ってきたお手製のおいなりさんを一緒に食べたりしてとても仲が良かったのです。

割と気に入られていたようです。その子は僕のそんなところも好きだったみたいです。で、そのお母さんが、手紙の中で、

「娘があなたのことを裏切るようなまねをして誠に申し訳ありません。親として教育者としてお詫びのしようもありません」

と述べ、目の前にその姿が見えるような感じでした。おかあさんは元学校の先生だったのです。そして、お父さんも。

おかあさんは明るくてとてもきちんとした人でした。しかし、やはりひとりの生身の女性でしたから、田舎で一人寂しくもあったわけです。

それで、この手紙に対して僕は、

「誰が悪いわけでもありません。お母様はもちろん娘さんも。

娘さんがあのとき本気だったのは嘘ではないのです。あのときは本気だった。それは真実。でも、人の心は変わります。変わるのが真実、実態なのだと思います。「変化こそが正しい」のだと思います。これはやむを得ないこと。仕方のないことです。それが分かっただけでも、良かったのかもしれない。誰も恨んでいないので、心配いりませんよ」

それは、まず自分にそう言い聞かせただけでした。そしてそういう美しい高みに立った言葉を吐かないと、「やっていられなかった」のです。切り抜けられなかったのです。

しかし、僕はそれを幻と気づかず、見誤ってしまいました。必ずしもそういう言葉を吐いたからと言って、実態がそうなっているとは限らないのです。そういうご大層な衣をまட்டுて、やせてミジメで疲れ切った自分自身を人目から隠したかっただけなのです。本当は。

僕はそれを取り違えてしまいました。それがその後続く何十年という苦しみの元になりました。

自分自身がやったにもかかわらず、自らが施したそのすり替えや自分を偽る巧妙なマジックに自分自身がだまされたことに全く気づかず、美しく高みに立った言葉を「考え出せ」ば、乗り越えられると錯覚し、そういう人間になれたと思い込んでしまったのです。その後そういった言葉をことある毎に考え出し続け、吐き出し続けました。

そのため、実態と言葉の間がどんどん乖離していったのです。美しく高みに立った言葉の影で、実態の僕はどんどん置き去りにされていきました。内と外が合わなくなっていったのです。生活も物書きも何もかも二重になって、内と外のつじつまを合わせる調整のために、一時も休むことなく、内と外を行ったり来たりしてますます疲れ、制御が効かなくなり、バランスを失って、40歳を過ぎてから12年間もの間、「鬱病」になったのです。

そのうつ病の僕の姿を見た弟が、珍しく静かな真顔で

「いつか、苦労したヤツだけが報われる日が来ると思うけどな」

と言ってくれましたが、閉ざしたアサリの殻の上からバターの味をしみこませるようなものだったのかもしれない。慰めにはなりませんでした。

「もどってくれ！と泣きじゃくる本心」というような本当の声を押し殺して、気の利いた、カッコいいことを、一方的に投げつけて、ひとり逃げるように高みへ駆け上がって、上から見下そうとしたのです。そういう殻をかぶったのです。

あの時は、そうしてそれ以降も。

大覚大悟のちも、己のみが救われるのをよしとせず、同じように苦しむ、より多くの衆生（しゅじょう）を救わんがため、いや、それ以上に、自らが得た大覚大悟の真贋（しんがん）を確かめんがために、敢えて妻帯をし、唸りを上げる煩悩の大海に再び身を置いた親鸞さんのまねは出来なかったのです。真（まこと）を何も持っていなかったからです。

ただの「高見の見物」客でした。

清水の舞台から飛び降りずに、清水の舞台から眺めおろして

「みなのもの、さても、ここまであがってこられるかな？んっ？」

と目をうっすら細めていただけだったのです。

今から見れば、「なんやねん、それ！張りぼてやんか？」ですが、つい最近まで、その「知らぬ間に誤動作する、こころのからくり」を、それが「だまし絵」だということにまるで気づきませんでした。親鸞さんとは全く以て、似て非なるものだったのです。お恥ずかしい限りのことです。

足下（あしもと）も見ずに、つま先立って無理に高みへ届こうとするような背伸びをやめて、地に足をつけること。身の丈になって正直に自分の実力をわきまえること。その実力のなさを認めて、受け入れること。たったそれだけのことが分からずに、それに気がついて、再び歩き出すまで、多くの過ちや間違い、誤謬、誤認識を繰り返し続けていたのです。

今、思うと、その間、約40年。あの20歳の時から32年後、一旦はその過ちに気づき、鬱病から立ち直って少しはましな道を歩き始めたのですが、いつしかまた傲岸不遜の憑依魔物に取り付かれ、またぞろ同じ過ちを犯すようになり、そのことを今度は幾多のひとびとから気づかされて、もう一度それよりはいましてまともな道に戻ったのは、ついひと月程前のことです。

多分愚かな僕のことですから、またぞろ同じ過ちを三度（みたび）繰り返すことは、間違いのないことだと思っております。

おそらくこういったことを何度も何度も繰り返すこととは思いますが、そのたび毎に、今一度、更にもう一度と、落ちた溝から這い上がって、土、埃（ほこり）を払い落とし、襟を正して、再び元の道に戻ろうとする気力がどこまで続くか？

これはもう、行けるところまで行けるよう、やってみるしかないのかもしれない。

掌編小説

「節ちゃん」



小学校を卒業して6年が経って、その卒業生ほぼ全員の進路が決まったある日、同窓会が開かれました。それは4月のことで、まだ5月病になる人も居ず、みんなわいわいがやがや。

ところがその時に、ふとした話しの流れから、節ちゃんが同窓会の二年前の今頃、交通事故で17年の生涯を閉じたことを知りました。

節ちゃんの本名は節子といい、当時としてもあまり今風の名前ではありませんでした。

当時僕らの通っていた小学校は、有名都立高校に入る前段階として、有名進学校である中学に行くための予備校みたいな小学校で、越境入学者なども居ました。お金を払って学区内の家に住んでいることにしてもらうのです。実は僕もその一人でした。

つまり殆どの家庭が裕福だったのですが、節ちゃんの家はそこの中であって、珍しく余り裕福とは言えない家庭でした。

頭は天然パーマなのか、それともかきつけていないからなのか、いつもぼさぼさで、聞くところによると、お母さんが働きに出ている間、節ちゃんが毎晩夕食を作っていたりするのでそれどころではないのだろうとのことでした。

そんなわけで、勉強ばかりしているぼくら同級生は、家事に忙しくて勉強どころではないせっちゃんのことを競争相手から抜かして無意識にも下にみるようなところがあったのです。僕もそうだったような覚えがあります。

ところが、5年生の家庭科の時間に、先生から出された課題の料理がうまく出来なくて、数人の男子がもたもたしていたのですが、時間も差し迫った頃、その節ちゃんが、ちゃちゃっと茹でて、刻んで、和えて、その男の子たちの前に出したのが、最後の課題料理のマカロニサラダでした。

「はい！これで全部出来たよね」

自分でもよく分からないのですが、その時の光景をぼくは妙にはっきり覚えていて、その後何回か思い出しもし、最近では、その頻度が多くなっているような気がします。特にこころがなんとなく弱っているときに多いような気がします。

別に、節ちゃんは初恋の女の子ではありません。どちらかというところと老け顔で、あまり可愛い方ではなかったです。地味で、言い方は悪いのですが「オバンくさ」だったような。

しかし何故か、自分に自信が持てず何のためにこの世に生を受けたのか分からなくなってしまうようなときに限って思い出すのです。

話は変わりますが、最近スーパーによく買い出しに行きます。ですが、スーパーで売っているパックのマカロニサラダは、甘すぎて量も少なく余り好きではありません。あのとき節ちゃんが、ちゃちゃっと作ってくれたマカロニサラダは、幾分すっぱ味が強くて、マヨネーズも少なめでさっぱりしていたし、量もドドーンと多った。

ぼくは今、一人暮らしで自炊をする境遇になっていて、時々マカロニサラダを作るのですが、お手本は何故かあのときのマカロニサラダの味です。そういえばあのとき以来、マカロニサラダは上手く作りたいと思うようになった気がします。

今思い出したんですが、節ちゃんには八重歯がありました。可愛い八重歯ではなくて、乱ぐい歯の一部として外に突出しただけの八重歯。

「早く食べなよ。授業が終わっちゃうよ」と言った時、笑い顔の端に見えた乱ぐい歯。

これまた何故かは分かりませんが、異常にはっきりといつも、何回もその時の家庭科の教室の風景と節ちゃん的笑顔をリアルに思い出すのです。

「わりい！節ちゃん。急いで食べるよ」

目の前に置かれたブリキ製のお皿にてんこ盛りに盛られたマカロニサラダ。

あのときだけは本当に助かりました。主要5教科は出来ても、日頃家事などやったことなど全くない僕や同級生は家庭科が大の苦手の子が多かったのです。

そういえば、あのとき、節ちゃんは自分の分はなかったんだ。それに誰もそのことには気づかなかった。そんなことに、50年近くもたった今、思い当たりました。

「…」

何とも言えない気持ちになりました。

掌編小説

「アンケ」



若い頃、ロシアに語学短期留学に行った折、我々短期留学の男子の間で、評判の女の子がいました。名前も分からず、どこの国から来たのかも分かりませんでした。小柄、金髪、黒い瞳のとてもかわいらしい娘（こ）です。

「あんな娘（こ）と話してみたいな。何語で話せばいいんだろう」などと言う話をしていましたが、その娘のそばにはいつも、古城の門番みたいなでっかい女の友達がついていて、虫払いをしているようでなかなかきっかけが見つかりませんでした。

ところが、ある日、与えられた自室のベッドの上でごろりとなっていると、扉をノックする音がしたので、「いいよ、入れよ」と横になったまま、言いました。同じ短期留学のクラスメートだと思ったのです。

ところが、入ってくる様子がないので、仕方なく起き上がって扉を開けると。立っていたんです、その娘さんが。ただし、その後ろにおばあさんも立っていました。無論とっさに言葉が出ません。第一何語を使えばいいのかも分かりません。当時ロシアではあまり英語が話されていなかったのです。

で、その娘さんが話し出したのは、英語でした。

「わたしは、アンケ。アンケ・ヴァレンチクです。西ドイツから来ました。後ろに居るのは私のおばあさんです。私一人で来るのを心配してついてきました。」

と、そこまでは覚えているんですが、一体この、かわいらしいドイツ娘が、僕の部屋に何しに来たのか？

おそらくは訊いたんだと思いますし、答えも聞いたはずなんですが、何故か今になって何も思い出せないのです。洗濯物が落ちていたんで届けに来ましたでもないし、日本語を教わりに来ましたがでもない。無論おつきあいしてくださいでは絶対なかったような気がしますが、ならばなんのよう出来たのか？思い出せないのです。

暫くして、アンケとおばあさんは扉を閉めて、多分どこかへ行ったんだと思います。でも、その後の記憶も定かではありません。

今、手元に、そのアンケと門番みたいな大柄な女友達と、当時の僕のクラスメートの男子が映っている写真が残っています。多分これは、通っていた外国人向けロシア語学校の入り口の階段そばだと思うのですが、クラスメートと門番女子はどこか、遠くを見ている目つきなのですが、アンケだけは僕が向けたカメラのレンズをじっと見つめている写真です。ですが、やはり、どうしてこういう写真を撮れるシチュエーションが成り立ったのか？それすらもよく思い出せません。

今見ると、アンケは、少しほほえんでは居るんですが、少し切ないような目をしているようにも見えます。

一体あのとき、あの短い時間で何があったのか？

で、暫く、というか、かなり真剣に当時のことを思い出してみると、なんでアンケが僕の部屋に来たのかを思い出すことが出来ました。

当時はかわいいドイツ娘が自分の部屋を訪ねてきたという事だけで血が上ってしまい、彼女が喋った片言のロシア語と英語交じりの話の中身を六すっぽ聞いていなかったのです。

それが今、いくばくかの語学知識を得て、その時の言葉を思い返してみると

「明日、西ドイツに帰ります。楽しい時間をありがとうございました。ダンケシェーン」
彼女はオアばあさんと一緒に、それを告げに来たのでした。

Anytime, anything always suddenly happens.

別れも気づきも、ある日突然やってくる。

And always too late.

そしていつも遅きに失する。

掌編小説

「夜桜の下、仔犬を連れた奥さん」



夜桜が街灯に映えて綺麗な春のある宵、会社帰りに公園の脇の道で、子犬の散歩をしている斜め向かいの奥さんと出会いました。

「お仕事ですが？いつも遅いんですね。お疲れでしょう。ご苦労さま」

と言うので、

「奥さんこそこんな時間に、毎日わんちゃんのお散歩ですか？大変ですねえ。どなたか他に
ご家族の方はなさらないんですか？」

と訊くと

「主人も子供もしないんで、しかたありませんわ。誰かがしないとこの子が可哀想ですから」
と答えました。

「お優しいんですねえ」

と言うと

「本当は気分転換」と言った後で、

「うんう、本当はダイエットが目的ですの！」

と幾分おどけた感じで答え、口元を緩めて笑いました。

自分は、家族に捨てられて独り者だという思いが心の片隅にあったせいかな、ついつい

「お幸せそうでいいですねえ」

と羨む（うらやむ）と

「そうでもないですわ。外見（そとみ）からはどう見えているか分かりませんが」

と少し陰のある口調になったので、自分は奥さんの今の穏やかな生活のあり方を肯定して
あげるつもりで、その比較に今時の若い人を持ち出して、

「幸せと言えば、結婚式が頂点で、その後だんだん下がっていくより、結婚式はほどほどで、
その後、だんだん上がって行った方がいいですよ。今の若い人は、みんな結婚式に力を
入れすぎているような気がします」

と独り言の評論みたいに言ったのです。

すると、奥さんは、返答に困っているのか、暫く沈黙がつづいた後に、ふと見ると、薄暗
い夜目にも、急に涙ぐんだ様子が感じられました。

自分は動揺しました。そうして気づかなかったことにしなくては、と咄嗟に思いました。
それで、

「春とは言え、まだまだ寒いですから、散歩もそこそこになさって、お家に帰られた方がいいですよ」

と言ながら、何事もなかったように、何も気づかなかつたように、幾分逃げるようにしてその場を立ち去りました。

それからひと月たった大型連休のある中日（なかび）に、突然奥さんのご一家は引っ越されました。連休中とて、会社に出ていた自分は、そのことを後日、ご近所の方との立ち話で知りました。

引っ越すという話も聞きませんでしたし、挨拶もありませんでした。

いつも散歩や会社帰りで合う度に世間話をする間柄だったのにと、少し裏切られたようなさみしさを感じましたが、同時にあのとき、当時苦しかった自分を励ますために思いついた理屈を、他人に与える効果も深く考えずに思い浮かんだまま不用意に話してしまい、ひょっとしてそれがもとで奥さんが引越しを決意されたのであれば...

「いやいや、其処迄自分の言に絵協力のある筈がない」

そうはおもったものの、それでも万が一、それがきっかけであったのであれば、夜桜の下、奥さんがどんな気持ちで仔犬を連れて散歩をしていたのか。

短編小説

「ゆりっぺ」



話を聞いたからと言って、特に自分で料理を作ろうと思ったわけではないのですが、出てくるものが、どういう手を加えるとそのような姿になるのかに幾分興味があったのと、離婚を経験した五十代半ばの男が一人で来て、そうそう偶然に、見知らぬ人がいい話し相手になることもそんなにはないので、自然といつも目の前にいるお店の板前さんとお話をするようになりました。

手さばきから、若いのにかなり研究熱心なのがわかったのですが、かといってそうした職人さんに有り勝ちな気難しさやお堅いところもなく話し方にも誠意が感じられるし、人当たりもいい。

趣味はというとロック。しかもギターを自作したりもする。そのせいか女のお客さんにも人気のあるちょっと面白い人でした。

ある夏の夜、同じカウンターの並びの一番左奥に、自分と同じか、それより少し歳上と思しき小柄な女の人が座り、なにやらこちらをじろじろ見ていました。

その日初めて見る人でした。

話し方や振る舞いが少し他のお客さんとは違うような感じがしました。ちょっとずれている感じがして「幾分浮いているかも」と思いましたが、どうやら僕と同じで、その人もこの若い板前さんがお気に入りの様子。盛んに話しかけています。と、同時にやはり時々、こちらをじろじろ。

ですが、その「関心」に反して、板前さんを頂点にした二等辺三角形の二辺は交信があったのですが、ぼくとその女の人を結ぶ底辺の交信はありませんでした。

その数日後、再び同じ配置になりました。

なにやら今度は、

「マイセンのカツサンドをたくさん買ってきたからみんなで食べて、お客さんにも」と板前さんに差出し、若い板前さんも

「毎回恐れ入ります」

と答えているので、幾分退屈をしていたこともあって、敢えて

「たいそうお金持ちですねえ」

と声をかけると、

「あなたもおひとついかががかしら？おいしいのよ、これ」

と言いながら

「そちらにいてもいいかしら？」

と僕の返事を待たずに、にこにこしながら隣の席に移ってきました。そして、

「あなたこの前、お見かけしたときに、お隣の方に、たばこ吸いますが大丈夫でしょうかとお訊きになっていましたでしょうか？近頃珍しい御紳士な方でいらっしゃると思うて・・・」

元々が、子供の頃から余り好き嫌いをせずに、誰とでも仲良くする質（たち）なので、程なく、それから何度か日時を決めて、お店で会うようになりました。

そのたび毎に、日本橋高島屋のどこそこの売り場のお土産だと言って、板前さんにそれを差出していました。よく見ると、受け取るときに、ほんの少しためらいのようなものがあるのが感じられました。

しかし、当のご本人は何も感じていないようでした。

とにかく日本橋高島屋が大好きなようで、日本橋の高島屋以外はデパートとして認めていないみたいでした。

訊くとその人は、高校までアメリカで暮らしていたそうです。そのせいかどうか分かりませんが、全く唐突に、かなり場違いなタイミングで英語が飛び出すのです。

ところが、時々使う、本人だけは「ここぞ」とばかりにねらったつморいの、その場違いなタイミングの英語の発音が何故かとてもへたくそなのです。

まず、長文は話しません。発音も巻き舌ではなくて、なんだか舌の中に直角三角形定規でも入っているような感じです。水を米語の発音では「ウァラー」というべきところ、なにやら「藁（わら）」に聞こえたり、気にしなくていいよ、の「ドンマイヌ（小文字）」が「呑舞（どんまい）」のように完全に漢字読み聞こえたりします。なんだかちよっと胡散臭い気もします。

確かにお金はありそうですが、何かちよっと変なのです。

甚だ傲慢かとは思いましたが、発音だけとれば、僕の方がまだましかもしれないと言う感想を抱いたりもしました。それにしてもそのような感想を抱かせてしまうレベルとは？

相当の年月、彼の地で暮らしたはずなのに、ここまで発音が直角、カタカナ読みなのは向こうで何かそうなる事情があったのかもしれない。例えば、暮らしていたのは外国だけれども、居場所としては自分の部屋ばかりだったとか・・・引きこもっていたとか。今見ると華やかに見えるけれど、ひとはわからないものだし。



そのうちその人は、初めはとても淑女然としていたのですが、暫くすると横にぴったり張り付いて、間においてあるお皿に乗った煮魚の身を箸でぐちゃぐちゃになるまでほぐしてから

「はい、お口、あーんして、たべさせてあげるからね」と言った後、

「おいちい？」

とまるで二十代の「彼女」のようになり、次は

「ホールのある子、あなたを狙っているわよ。そんなこと、させないから。来たら嘔みついてやる！」と夜叉にもなり、最後は淑女の「し」の字も、跡かたなく消え失せ、それがその人一流の親しみの表現なのか、それとも本気でそう言っているのか、わからないのですが

「おだまり！シャラップ！頭（ず）が高い、静かにおし！」

とまで言うようになりました。

食べ方もあまりキレイではないし、こうまで乱暴な口の利かされ方をされると

「本当に言う通りの素性なの？」

と疑いの気持ちが生まれてきました。

ところがあるときには、そうした「猫っかぶりの淑女」が口にするとは思えないほど、殊勝な態度で、しかも全く前後の話とは脈絡なく唐突に

「わたし男の人とああなるの、キライなの。ああいうふしだらなの、イヤなの！分かる？ ユーノウ？」

と酒の席ではあったにせよ、返答に困るような内容の質問を仕掛けてきたりもしました。そうしてその後「うにゃむにゃ」いいながらカウンターに突っ伏してしまうのです。

と、思いきや、またぞろそこから、やおら頭（こうべ）をもたげて、

「わたし、頭のいい人好き。それに、どこに住んでいるかなんて訊かないところも」

といいつつ、こちらから質問したわけでもないのに、自分は実業家の一人娘で、家にはお手伝いさんが居たこと。

家族と帰朝後、ミッション系女子大に進んだが、卒業後働いたことはないこと。

父親が「ゆりっぺ、ゆりっぺ」と猫かわいがりしてなかなか手放してくれなかったの
で、結婚は37歳までしなかったこと。

結婚した相手は鉄道技師で、週に何回かは泊まりで帰って来ないこと。

料理はしないで、ほとんど出来上がったものをお取り寄せするのだが、主人は文句を言
わない。そういう約束で結婚したのだから、ということ。

お子さんは、自分みたいなのがもう一人居ては相手をするのにこまるので、作らなかつ
たこと。

父上は既に他界していて、莫大な遺産を、そんなにあっても仕方ないけど、相続だけは
したこと。

ここで飲んだ後は、いつも六本木のバーに行って、みんなにドンペリをおごっているこ
となどを酔った口から、きいている方もいささかうんざりするでしょうが、こちらも、こ
こにかいたのですら要約済みの抜粋版でしかないほど、このことに関しては細大漏らすま
いとでもしているかのように、そのひとは、ひとりでどンドン喋ってきました。

そんな話を聞いていてふと思ったのですが、この人は、かなり幼い時から、母親がいな
かったんだろうなと思いました。

滞米時の暮らし向きは知るよしもありませんが、本邦においては、長いこと父一人、娘
一人。いつもお取り寄せかお手伝いさんの料理ばかり。料理を作ったこともなければ、作
ろうと思ったこともない。作ってくれともいわれなかったから。でも父娘、仲良く暮らし
ていた。

それともう一つは、なんだかとっても焼きもちやきで、こころの振幅もかなりあるひと
だなとも思いました。焼きもちについては、「嫉妬」や「ジェラシー」ではなくて、
「焼きもち」。お目めメラメラではなくて、ほっぺを「ぷーっ」と膨らますような。

例えば、その人がいないときに、僕一人で行って、ほかの女のお客さん、それはもう80
歳のおばあさんを囲んでの二、三人の女性だったのですが、僕がそのグループと仲良く話
しているのを入りしなに目にして、僕と目が合った途端、「ぷい」とへそを曲げて、お店
から出て行ったりもしました。

お店の子に噛みついてやると言ったことや、ぷいと出て行ってしまったことを思い合わ
せると、この子、といっっては失礼なのですが、なんとなくやはりこの子としか言いようが
ありませんので、この子は、まるで大好きな親戚のお兄ちゃんを盗られまいとする、兄妹
の居ない女の子が「くるな！ここからあたしの陣地。私のお兄ちゃんよ。家来は私だけな
の。わかった？さわんないで！あっち行け！」みたいな感じがしたのです。

他の人には女王様然と振る舞うのですが、何故か僕に対しては、まるで小四の女の子み
たいに振る舞っていました。

しかも、勘が強くて、焼きもちやきの子なので、確かにいると問題は起こすし、そのくせまわりついて、いささかうるさく思うこともなくはないのですが、居ないとなんとなく物足りなくもあり、妙な心境というか、気分でした。



そんなある秋の夜、かなりのレベルで酔っているのに、六本木のバーに行こうとするので、心配になって

「ゆりっぺ、もう帰った方がいいんじゃないかな」というと

「おだまりっ！誰に向かって口をきいているの？私に指図しないで！」と吠えた後

「ご主人様じゃないんだから、ゆりっぺ、なんてなれなれしく呼ばないで！「百合子様」と、お呼びっ！」

と更にご機嫌斜めになり、それでもよたよたしながら行こうとするので、やむなく電車で一緒について行きました。

「わたしのこと心配？そう？だったら、嬉しいわ。許してあげる。かわいいっ！」と、今度は甘えん坊さんの態度です。

ところが、お店に入る直前になって

「子供じゃないんだから、平気よ、早く帰ってよ。あたし、みんなに優しい人なんて大っ嫌い！」

と、僕の何がご機嫌を損じたのか分からないまま追い返されてしまいました。

しかし、それでもやはり心配だったので、バーのあるビルの外に出て待っていました。

もう午前の1時を回っています。

小一時間ほど待ちましたが、お店から出てくる様子がないので、ビルの階段を上がってお店の前まで行くと、その子が重そうなドアの前の床に突っ伏して眠っていました。

しかもお漏らしをして、その水たまりの中に

驚いたことに、大きい方も、一本ごろりとおわしまして。

おそらくスラックスパンツを脱いでいたのかも。

ちょっと困りました。

いや、かなり困りました。

いやいや、おおいに困りました。

見て見ぬふりをしようと思いました。

ひょっとして、本当は眠ってはいないで、薄目を開けているのだとしたらと思うと、出来るだけ静かに、気づかれないように後ずさりをして階段を忍び足で降りました。

ドンペリを毎回頼む上客に、お店はこんな扱いをするだろうか？ということのを思い合わせると、何か見てはいけないものを見てしまった、恐怖とも罪悪感ともつかない気持ちに襲われました。

しかし、放っておく訳にはいきません。

仕方がないので、タクシーを呼んで、無理矢理抱え上げて、くずおれるように二人でバックシートに転がり込みました。

タクシーの後部座席で、その子は本当に眠っているのか？本当は起きているのか？よく分かりませんでした。

とにかく何も気づかなかった、見なかったことを印象づけないと、と思い、なにやら独り言のように、いろいろおとぼけの絵空事を言ったのですが、それが役に立ったのか立たなかったのか分からないまま、2万円を払ってタクシーから降り、運転手さんにお客さんを起こしてから、言うところまで届けてあげてくださいと頼んで、地元の駅のタクシー乗り場から小一時間かけて歩いて自宅に戻りました。

多分もう、連絡してこないだろうなと思いました。



ところが初冬のある夜、また、その子はお店にやってきました。そうして、ここは飽きたからほかのお店に行こうといいだし、別のお店に移りました。

そこは居酒屋さんなのですが、半個室のボックス席になっていて、席に着くなり

「わたし、ここのオーナー社長と懇意にしているの。ちゃんとサービスするのよ！」とお店の人を一喝。あまりの唐突さと、場違いな権威の発揚を、こりゃちょっとまずいと思った僕は

「自分ももしそんなこと言われたら、どんな気持ちになる？却って逆効果じゃない？やめた方がいいと思うよ」と言うと、

「それもそうよねえ。アツタマいい！好きよ」

と言って、唇を押しつけてきました。

ぼくはお店の人が見ているからと、遠慮をしたのですが、その子はなかなか離れてくれませんでした。

ふと見ると、靴を脱いで上がった板張りのボックス、そのテーブル下のやや厚手のウール地の靴下に穴がいているのが目に入りました。

お金持ちの奥様の靴下に穴ぼこ？

そういえば、お金持ちの奥様の割には、スカートをはいている姿も、和服の姿も見たことがないなと思いました。いつもスラックスかジーンズです。

その後、暫く飲んでから、僕らは外に出て、少しふらつく身体を支えてあげながら、駅まで連れだって歩いて行きました。

そうして別れ際、拒むように遠慮したり、靴下の穴ぼこに気づいちゃったりして、ちょっと可哀想だったかなと思い、酔っていたせいもあって、僕は駅、改札前の人通りの多い中で、殆ど鯖折りをするみたいに、その子を、ぎゅっと抱きしめました。

その子の身体が後ろに、ぐっとのけぞりました。ぼくは力任せに鯖折りを続けながら「まいったか？まいったか？」

と、「何がまいったか？」なのか自分でもよくわからないままこころの中でつぶやき、自分でもわからないそれが、逆にその子にはわかったのか？その子は、今までになく腕の中で、消え入るくらい静かにしゅん、となってしまうました。



その後一度会い、その前にあったとき「しゅん」となっていたので、今回はその「しゅん」からスタートかと思いきや、それを「なかったこと」に掻き消すかのような女王様然とした態度に出てきたので、本当は九州男児の上に勝気な自分は

「俺は、あんたの奴隷ではない。帰る」

と言ってその子を残したまま席を立ててあとも振り返らず、さっさと表に出てしまいました。

それから今一度、偶然通りで会ったとき、その子は

「この前、すぐに後を追っかけたのよ。ごめんなさいって言おうとおもって。駅のほうまで行ったり、反対方向のショッピングプロムナードのほうまで行ったり。でも、見つからなかったわ」

その後、その子と暫く会うことはありませんでした。夏に知り合い、秋を深めて、大晦日が過ぎ、年明け暫くして、聞いていた携帯の電話番号に電話を入れました。

以前もお誘いの電話をしても出ないことが何回かあったので

「これじゃあ、電話番号を教えて貰った意味がないと思うけど」と言うと

「ご主人様がいるんだから、そのくらい分かるでしょ？」

と言われたことがありました。

それで、以降、電話は控えていたのですが、なんかやたらに恋しくなって、「禁を破って」電話をしてしまいました。

「今日くらいは、ちゃんと出てくれよな」と思ってかけたところ、数回のコール音の後、誰かが電話に出ました。

「はい、百合子の夫ですが」

慌てました。

ご主人が、その子の電話を取り上げてしまった？見つかったの？

僕は当時、離別した後のひとりもので、問題はなかったのですが、相手にとっては「不倫」と言われても仕方がない状況です。まずい！

そうとっさに思って「ちょっとした知り合いで、たいした用事ではないんです。はい！」と言おうとしたとき、

「生前百合子がお世話になられた方ですか？ありがとうございました。百合子は今年のクリスマスイブの前日、23日の深夜に亡くなりました。お風呂の浴槽で溺れ死んだんです。さみしかったんだと思います。本当に可哀想なことをしました。私も留守がちで。それで毎晩飲み歩いて、とうとうその日も、泥酔して帰ってきた後、お風呂に入って、蛇口を開きっぱなしにして眠り込んで溺れてしまったようです。朝仕事から帰ってきて、返事がないので、家中あちこち探し回って、お風呂場で見つけました。何が起きたのか分かりませんでした。茫然自失でした。

警察が不審死として、調べにも来ました。慌ただしい年の瀬とお正月でしたが、やっと少し落ち着きました。どちら様か存じませんが、出来れば百合子の冥福をいのってやってくださいまし」

いつの間にか電話は切れていました。

おそらく長い事、自分が無言のままにいたからかもしれません。

原稿用紙 3 枚以内掌編小説シリーズ

「老斗（らおど）」



キリっとして如何にも気の強そうな顔をしているのに、意外にも子供好き。
お店にやってくる子供を見ると相好が崩れる。
何度来てもやはり相好を崩す。
見てくれ構わぬ働き者。地べたにはいつくばって念入りに雑巾掛けをする。
故国からやってきた後輩の面倒もよく見る姉御肌。
反面少し焼きもち焼き。
それはすぐ表情に出る。
子供みたいなところもある。
思ったよりお茶目でユーモラスだ。
けれど頭はなかなかいい。
学がある訳ではなさそうだが、気働きと回転が速い。
今どき我が国には居ないタイプ。
それで外見はというと、実際そんな恰好をしている訳ではないが、イメージとして
「黒いチャイナドレスに身を包んだ謎の美人人妻スパイ」
初めお互いの国の言葉を聞きあい教え合う処から始まって、
助けたり助けられたり、
庇ったり庇われたり、
手に入りにくいものを手に入れてやったり、家族にしか出さないという賄い料理を食べさせてもらったり。
行くと自分の紹興酒のボトルには一目見てわかる様に必ずゴム輪が巻かれておりラベルの上には「老人」と書かれている。
初めは何も言わなかったが、だんだんこちらの気持ちが動くにしたがって気になりだした。
そしてある日
「確かに俺はじいさんだが、何もわざわざ「老人」と書く事はないだろう。なんで「老人」と書くんだ？」

と聞いてみたが、なにやらにやにや笑うばかりで答える素振りがまるでない。

顔には「ヒッ、ミッ、ツ」と書いてあるように見える。

例のお茶目顔の上にそう書いてある。

処があるとき、本人がしばらく席を外していたので、幾分暇を持て余し、そのボトルを何気なく見ていると「老人」と書かれているとばかり思っていた文字が「老人」ではなく「老斗」と書かれていることに気づいた。

「老人じゃないのか。でも老斗ってなんの事だ？」

それで手元のスマホアプリで調べてみると「らおど=いつも斗(たたかって)いる」と出た。

戻ってきた俊麗にそのことを言うと

「アナタ、イツモ、タタカッテイル」

と恥ずかしそうに照れ笑いをした。

其れが得も言われず可愛らしかった。

「カワイイってなんていうんだ？」

「くーあい」

「じゃ、ニー、クーアイ、クーアイ。フェイチャン (=very)、クーアイ」

結局彼女とは結ばれることはありませんでした。5年前の事です。

しかし俊麗が呉れた「老斗」という言葉だけは心の中核に残っております。

お怖れながら、今思えばあの時初めて耳目した「老斗(らおど)」というたった一音一語がひとの「性分(しょうぶん)という奥底」に忍び込み、その後の自分の歩き方を密かに決定づけたような気がしないでもありません。

原稿用紙 3 枚以内掌編小説シリーズ

「探し物はなんですか」



「お前が仕事できるの見れば分る。だからと言って幾らお前に理が在ったとしてもああいう言い方をしてもいいという事にはならん。もし自分が年上で仕事ができる年下から今お前が言った様な言い方をされたらどんな気がする？それを考えてから物を言え。常に自分が言われる立場だったらどうかを考えてから口にしろ。いいか、分ったか」

「…」

「お前が憎くて言っているんじゃない。心配だから言ったんだ。五月蠅いとは思うが」何回目かの訪問で少しは話す様になってはいたものの、アルバイトの女の子に言うには些かきつ過ぎた気も致しましたが思わずそう叱ってしまいました。

その時自分は定年間近の年齢で、店の女の子は高校を1年で中退して間もなくでした。

「うっせえ、糞爺。客だと思ってエラソな口利くんじゃねえ」

相手を叱るに先立ってその位の事を言わる覚悟はしておりました。

それ迄大抵そうでしたから。

処がその子はそういった類の事は何も言わず

「叱られるの、お父さんがいたらこんなかなあって。あたしには居ないけど」

その後何回か街で会いました。

「会った」と言うのは逢瀬を重ねたという意味ではなく、気付いた向こうから何回か声をかけて来たのです。

「ねえ、どうしてお店来てくれないの？」

とか

「今度絶対に来てよ。来ないと私、怒っちゃうから」

とか。

しかし、その後その店には一度も行きませんでした。

会社でその話をすると同じく定年間近の同僚から

「何それ、勿体ない。そんなチャンス滅多ないぜ」

と言われたのですが

「そんなヤバ事出来んよ。未成年略取で獄門磔が相場よ」

と冗談めかして話を他にもって行こうとしました。

その時迄に自分は一度離婚をしておりましたが、その経験から自分が女性とお付き合いをするのに全く不向きな人間である事を知っておりました。

「自分はしたい事を直ぐ夢中になってしてしまう我儘な人間だ。相手が「それでもいいから」と初めは言っていたとしてもそのうちヤになる。或いは相手から先に機先を制して「それは分かっているから」と言われた場合にも却ってこちらが気を使い、逆にしたい事を控えてしまう。いずれ先々、お互い窮屈になる」

その子には筋違いな話を筋立てて考えておりましたら同僚が

「俺なら絶対味見だけでもするがなあ。なんせ「据え膳喰わぬは男の恥」

だが女もそこ迄言ってくるんだったら何もせん方が余程恥になるんじゃないか？相手にしてみれば？」

「俺の恥はどうでもいいが、相手には一時恥を搔かせてもその先を妙にさせる訳にはいかん」

「なに神妙がってる？」

「違うよ。流石「お父さん」って言われるとちょっと」

「「お父さん」は間違いなく逆使いだぜ。甘えたいって言う謎かけ」

「ようわからん」

といつつそんな気もしておりました。

しかし何故かこうした幸風には反射的に足止まるのが常でした。

「何止まって、何探してる？」

となると、自分にも

「よう分らん」

のも又、常でした。

(完)

(著者プロフィール)

うときゅう いっき

本名 宇都宮一貴 (うつのみや かずたか)

一九五三年東京生まれ。早稲田大学第一文学部ロシア文学科を二回留年の後、卒業。大手電機メーカー商品企画部に二十年間勤務。同子会社経理部等に十六年間勤務。四十歳から五十二歳まで十二年間重度うつ病を罹患。左遷、リストラ、降格、離婚、家族崩壊の後、生還。定年退職後、嘱託社員契約を辞して株式会社うとQを設立。趣味は観察すること、考えること、書くこと、カメラの四つのk。著者名は苗字、宇都宮一貴の音読みで、中学校時代の仇名に由来する。

宇宙の「う」

東京都の「と」

宮殿の「きゅう」

数字の「いち」を詰まり音便で「いっ」

貴族の「き」

で、うときゅういっき となります。漢字にするとかなり御大層な名前に見えますので、敢えて音読みひらがな表記にしております。

ホームページ：<http://utokyu.co.jp>

(出版情報)

著 者 うときゅう いっき

発行人 宇都宮一貴

発行所：株式会社うとQ

〒二一五・〇〇一八

神奈川県川崎市麻生区王禅寺東5丁目34番7号

電話：〇四四・九八九・一六九八

発 売 株式会社 うとQ

編 輯 ナレッジフォレスト (大竹鉄哉)

カバーデザイン&DTP 製作 ナレッジフォレスト (大竹鉄哉)

©Kazutaka Utsunomiya uploaded in japan 2020

発行日：二〇二二年十月二日 発行

本書の一部または全部について、著作権上、著作権者の承認を得ずに、無断で複写、複製することは禁じられています。

(その他著書)

●多数 (二〇二二年十月二日現在、一一〇冊くらい)

●尚、掲載写真は全て google 画像サイトの著作権フリーのものをダウンロードして使用しております。当社には著作権、版權は全くない事を明記させて戴きます。